

白石 隆 著

『運動の時代——ジャワにおける大衆  
的急進主義 1912～26年——』

Takashi Shiraishi, *An Age in Motion: Popular  
Radicalism in Java, 1912-1926*, イサカ, Cornell  
University Press, 1990年, xxiv+365ページ

関 本 照 夫

I

今世紀初頭の中部ジャワのソロ (Solo) の町に、ハジ・モハンマド・ミスバ (Hadji Mohammad Misbach) という男がいた。1876年頃王宮協の大モスクの裏手、サントリたち (santri, イスラムの教えによく通じた敬虔な信徒) が集住するカウマン街に、豊かなパティック商人の息子として生まれ、イスラム寄宿塾に学びイスラムの宣教師として民衆のなかに身を投じ、たびたびの投獄や追放の時期を除けば、このカウマン街の住居を離れることなく、ただし最後は、イリアンの流刑地マノクワリでマラリアを患いながら50年ほどの生涯を終えた。1926年のことである。

ちょうどこの年は、ジャワではじめて起った近代の大衆的政治運動が、共産党の自然発生的蜂起と解体とともに終焉にいたる年でもあった。ミスバは真に敬虔なムスリムであり、その信仰ゆえに農民・労働者の組織にむかい、躊躇なく彼の理解するマルクス主義・共産主義を選んだ。つまり彼はイスラムから共産主義へと転身したのではなく、共産主義が神の道であった。民族主義、イスラム、そして共産主義という、この時期の運動と思想にあてはめられるふつうの分類枠組では、彼は「謎」そして「分類不能」である (本書 342ページ)。この謎を謎のままにしてしまい分類を不能にしてしまう従来のインドネシア史理解の枠組を疑問にさらすことが、この一編の歴史叙述をつらぬく陰の主題になっている。

本書の章別構成は次のとおりである。

第1章 舞台

第2章 プルグラカンの誕生

第3章 運動の時代

第4章 スラカルタにおけるインスリンデと農民ストライキ

第5章 プルグラカンの中のソロ

第6章 反動の時代、党の時代

第7章 イスラム主義と共産主義

第8章 最後の年

エピローグ

この大部の書は、1912年から26年にいたる大衆的政治運動の誕生・高揚そして解体を詳細に描いている。1912年はソロの町にイスラム同盟が結成され言説のみならず大衆の行動がはじまる年、そして26年は、労働者・農民を加えてしだいに急進化していった運動が、政府の弾圧と、妥協・後退か、それとも闘いかという左右の分裂により追い詰められ、今から振り返るかぎりではおよそ無謀で成算のない蜂起のなかで崩れ去っていった年である。こうしたことのかぎりなら、インドネシア近代民族主義運動の初期の歴史としてよく知られており、さまざまな文献がすでに存在する。にもかかわらずこの本はまったく新鮮であり、これを読んだ後では、既存のインドネシア近代史の標準的叙述が気の抜けた生ぬるいビールのように思えてくる。その理由はいろいろある。

II

まず第1に、この本はおもしろい。最後まで夢中で読ませてくれる。巷間に書物があふれているにもかかわらず、読書の楽しみを感じさせてくれるものがまことに少ないことに、いつもぶつぶつ不平を言っている評者にとって、これはとても大事なことである。まことに豊かな細部と、それを一編の物語に織り上げていく全体の構成力は、著者の同僚であるベン・アンダーソン (Benedict Anderson) のすばらしい「読み物」(*Java in a Time of Revolution: Occupation and Resistance 1944-1946*, イサカ, Cornell University Press, 1972年) を思い起させる。ただ、ここに作文教室のような贅辞をならべてもしようがあるまい。もっと具体的に言うなら、物語の舞台をソロ市とその周囲の農村にしぼって描きつくしていることに、本書の大きな魅力がある。そこに現われるのは、スリ・ウダリ

公園のレモネード、パティック産業の浮き沈み、村落再編成政策がもたらした個々の農民の暮らしの転変など、日々の生活の情景が浮かび上がってくるようなある時代の地方史であり、また、そこに今世紀の10~20年代を生きていた特定の顔と名をもつ登場人物たちである。ただしそれは限定された地方史ではなく、そこで運動に加わった人々が、試行錯誤的に、また一人称の個人的スタイルで、作りだしていく新たな行動と思想が、結果としてインドネシア史を準備することになる。叙述のなかからインドネシア史が作りだされるその過程が浮かび上がってくるのである。

スラカルタ(Surakarta)の理事官、その配下の各地の副理事官たちの通信・報告が豊富に使われているのは、従来のインドネシア史研究の少なくとも当為としては、当然のことなのだろう。だがそれに加えて、いやそれ以上に、同時代のソロ市の「原住民=ジャワ人」の手になるじつにさまざまな新聞・雑誌類が、渉猟されたくみに使いこなされているのは、歴史にとどまらぬ諸分野の今後のインドネシア研究にとって、手本にしよう、またすべきことである。もっとも「新しい原史料にたんねんにあたっている」というのは、歴史学の業界内で決まり文句のほめ言葉のようであり、いくら「たんねんにあたって」もらっても、できあがった歴史叙述がつまらなければ、専門外の読者にはやはりつまらない仕事なのだから、ここではやはり史料を使いこなして一編の物語を織り上げた著者の力に、大きな賛辞を呈したいと思う。

### III

そこで第2に、著者の議論のより核心にあたる部分にふれることになる。1912年に先行する、いわゆる民族主義運動の黎明の時代が知識人・ジャーナリストによる言説の時代だったとするなら、著者はこの書であつかう時代をプルグラカン(pergerakan)すなわち「運動・行動」の時代として描きだす。新聞、大衆集会、演説、労働組合、ストライキ、さらに政党、もろもろの「主義」、そして大衆組織という政治の新しい諸形式が用意される時代である。著者は「プルグラカンとは言葉を移しかえわがものとする複雑でダイナミックな過程だった」と言う(339ページ)。たとえば、

おなじく「集会」を意味しうるにしても、プラパット(perapat)なる語がしめすものが、相争う農企業と農民の代表を為政者が集め、上に立つ公平な権威として双方の言い分を聞き裁可するという伝統的な集会の形式だったのに対し、この時代の人々はオランダ語を借りて“vergadering”と呼ばれる大衆的政治集会を組織してそれに参加し、その語を自分の方法と必要にしたがってわがものとしていく。

著者の主張では、同時代のオランダ植民者も、また後のインドネシア国家も、この時代の運動を人種やイデオロギーで分類された諸組織の枠組に不当に押し込んでいる。また、カルティニ(R. A. Kartini)とブディ・ウトモ(Boedi Oetomo)にはじまり、「青年の誓い」とスカルノの国民党によって完成するはずのインドネシア民族主義の、過渡期の表現と見るに終わっている。だがこの時期の運動に参加した人々は、まずなにより組織の言葉でなく一人称で語り考えていた。人種の区別を越えて個々人がさまざまな形で結びついていた。また、民族主義の言葉に限定されるのではなく、「汎イスラム」「国際共産主義」といった、さまざまなべつの声が混じりあっていた。したがって、この時代の人々が生き経験した現実、思想、言語に、あらためて直接ふれてみる必要があるというわけである。

そこで本書では、たとえば今日のインドネシア国家の正史的な著作『インドネシア民族史』(Sartono Kartodirdjo ほか編、*Sejarah Nasional Indonesia*, 第2版, 全6巻, ジャカルタ, Balai Pustaka, 1977年)に典型的に見られるような諸組織の歴史ではなく、個人により大きな焦点をあてる。主要な登場人物はチプト・マングクスモ(Tjipto Mangoenkoesoemo)、マス・マルコ(Mas Marco Kartodikromo)、そしてハジ・ミスバの3人、いずれも妥協を排して新しい世界の理想を掲げ続けた急進派、私利を省みぬ廉直な精神を最後までたもった人物、そしていずれも流刑地で病に倒れた人々である。標準的な民族主義運動史でなら、チプトは民族主義者、マルコは共産主義者という分類枠組に一応収められうるのに対し、ミスバばかりは初めにふれたようにどうにも分類不能である。そして彼についての既存の研究はまことに乏しい。その彼がみずから人に訴え組織するため闘争の渦中で著した、多数の著述をたどり、彼自身の行動と思想を描きだすことで、本

書は抜き差しならぬ臨場感を獲得し、また新しい視野と課題を提供する。

本書の題は「運動の時代」であり、主題は運動（ブルグラカン）である。その中心人物たるにふさわしくミスバは運動の人であり、その思索は運動と一体である。そのため著者がくわしく紹介するその思想は、直截で力強くまた単純であるとも言える。ミスバにとって神の道とは平和、幸福、正義の実現であり、それを妨げ抑圧、貧困をつくりだしている現代のサタンは資本主義である。おそれることなくこのサタンと戦うのが真のイスラム教徒のつとめであり、口先でイスラムを語りながら政治から遠ざかり行動を避けるムハマディア (Moehammadijah) の徒やチョクロアミノト (R. M. Oemar Said Tjokroaminoto) 流のイスラム同盟は贗のムスリムである。神の道はたえず動き続ける運動であり、立ち止まることは許されない。

## IV

ミスバの思想をたどることで著者が意図しているのは、特定の時代と場所に生きた1人の人間が、コーランの言葉、マルクスの言葉をまったく新しい現実、新しい運動を解く自前の言葉に変えていく過程の記述であり、イスラム自体、マルクス主義自体を論ずることにはない。そこで評者の私見を付け加えることになるが、ミスバを今日から見れば、潔き意図のもとの大きな過ちということになるかもしれない。あるいはまた、運動の初期・過渡期の試行錯誤という、著者が批判の鋒先を向けようとする見かたが、結局また頭をもたげてくるのかもしれない。だが、現在を自明の与件、確定した終着点として、そこから過去を裁断することだけが、歴史の仕事ではあるまい。「かつてこうであったこと」と、未来に向けて「こうであるべきこと」のあいだで、なにごともしかには定まっていけないのが現在であるとするなら、未来に向けてミスバに何を読む

かが問われるはずだ。この仕事は、今インドネシアの現在を生きてなんらかの意味で運動のなかにある人々、神の道をさぐっている人々が、真によく担いうる仕事だろう。

評者は本書に惹き込まれて夢中で読み、多くのことを教えられた。歴史書として、また政治史・思想史の事例研究として、この本が高い水準の優れたものであることはまちがいない。ただ読者というものは、とりわけ狭い意味の同業者の枠をはみでた読者というものは、欲が深い。評者にとって、著者の議論が結局つまるところ最後に目指すものは何なのか、読み終えてまだわからないところがある。その点では著者は実に禁欲的に見える。今日のインドネシアの国家と政治を準備する諸形式が、はじめて新しく沸き上がってくる過程を描きかかったということなのか。それとも、オランダ植民地当局にせよ、その後のインドネシア国家にせよ、国家の制度的形式が馴致し押さえ込もうとする政治・思想運動のより無定形で豊かな現実を提示しようとしているのか。著者は運動が「暴力的な死をとげた」という表現を何度も印象的に使っている。その暴力とは国家の暴力でもある。だがまたそれは、著者がやはり断片的ながら何度も語っている運動自体の潜勢力としての暴力性、とりわけ運動が農民を捉えた時に押さえがたく湧き上がってくるアナーキーでもある。ジャワ農民のこのアナーキーとは何なのだろう。一般に争いや攻撃を避ける面、アルスス（優雅・洗練）の形式秩序に捉え込まれている面のみがよく知られる中部ジャワの農民のアナーキーと暴力を、どこに見出しどう描いたらよいか。これは評者自身が考え解いてみたい課題である。このことはほんの一例にすぎないが、本書はインドネシアの近代について、さまざまな議論の触媒になるべき本である。その民族主義について、またそのイスラムについて、本書の挑発に乗って論を起こす者が、日本にもインドネシアにも多いことを祈りたい。

（東京大学東洋文化研究所教授）